

# 2019年『本読み会』の活動

大野の  
一口コメント！

日時	イベント	作家	作品	作品紹介
2/16 (18人)	第七十七回	ウィリアム・シェイクスピア	『ロミオとジュリエット』	敵対する二つの名家にそれぞれ生まれた恋人たちが、しかしその恋を成就することは許されず、死を迎えることになる。誰もが失いながらも憧れ続ける、「狂気」とも言える若さ、愚かさ、そして愛。天才シェイクスピアが描いた、“世界一有名なラブストーリー”。
<p>第六回で扱って以来、15年ぶりの登場。『本読み会』で、同じ作品を二度扱ったのは、今のところこの作品のみ。劇聖シェイクスピアは、やっぱり別格扱い？です。</p>				
3/30 (15人)	第七十八回	久保田万太郎	『ゆく年』	明治22年の浅草に生まれ、滅びゆく江戸下町文化の最後の空気を吸って育った久保田は、生粋の“江戸っ子”として、下町言葉を自身の作品に吹き込んだ。日本に初めて登場した、“生きた言葉による会話劇”。
<p>雪の降るラストシーンが印象的な戯曲。たったワンシーン、父親を見つめる子の姿に、何かが揺さぶられるのを感じます。一瞬を切り取る感性の中に、リアリズム作家の筆遣いが。</p>				
5/25 (14人)	第七十九回	マーティン・マクドナー	作品名非公開	グロテスクな暴力とブラックユーモア、その中に不思議と漂う叙情。地方や家庭の中にこそ、世界のあるがままの姿、不条理が横たわっているのかもしれない。現役で活躍する、最も偉大な劇作家の一人。訳あって作品名は非公開です。
<p>これだけ人気があるのに、ほとんど翻訳がないマクドナー。英語読めないのに、電子書籍やペーパーバックで戯曲を買い漁り、頑張って読みました。『本読み会』で扱えて良かった！</p>				
7/13 (12人)	第八十回	松田正隆	『夏の砂の上』	舞台は長崎。描かれるのは、ジリジリと焼かれるような乾いたひと夏。坂の上の家で交わされる“静かな”会話には、しかし何かを失った人々の苦痛の叫びに満ちていた。平田や鈴江と共に、“静かな演劇”の旗手とされた松田正隆の傑作戯曲。
<p>ちょうど主宰二人が高校生の頃、“静かな演劇”が大流行でした。インターネットが今のよう に機能していない時代、松田正隆や鈴江俊朗の名前を知っていると、なんとなく“ちゃんと演劇やってる人たち”というような感じがしました。</p>				

日時	イベント	作家	作品	作品紹介
8/24 (9人)	第八十一回	ジョージ・バーナード・ショー	『聖女ジョウン』	百年戦争でフランスを解放へと導いたフランスの国民的英雄ジャンヌ・ダルクの栄光と破滅。しかし、ショーが描いたのは、聖女ジョウンその人ではなく、その強い光に照らされ、美しさも醜さも露わにされた、どこまでも世俗的な人々の姿だった。ノーベル文学賞作家ショー、渾身の傑作戯曲。
<p>これだけ重要な作家なのに、「え、まだ扱ってなかったの!？」という感じ です。読んでみると意外と笑えるシーンが多く、作家のお茶目さが伝わって きました。ただ、構成はしっかり骨太で、大作家の筆力を感じます。</p>				
9/22 (81人)	『戯曲を読む会 全国大会2019』	三好十郎 ／マーティン・マクドナー	『好日』／ 『ウィー・トーマス』	主人公は貧しい暮らしを送る劇作家「三好」。自らとその周囲の人々の生活を生々しく、そして滑稽に描いた三好戯曲の一つの完成形とも言える作品だが、発表されたのは作者の死後のことだった。『浮標』『胎内』『炎の人ゴッホ』などで知られる三好十郎の“私戯曲”の傑作。
<p>始まりは、全国各地の“戯曲を読む会”が集まったら楽しそう！という思いつきでした。準備と総括に一年かかった大変な企画でしたが、たくさんの団体、人との繋がりができました。今後が楽しみ！</p>				
10/20 (16人)	第八十二回	寺山修司	『毛皮のマリー』『疫病流行記』	次々と現れるグロテスクでエロチックなイメージの中、美しき男娼・毛皮のマリーが語るのは、彼の息子である美少年の出生の物語。（『毛皮のマリー』）。ヨーロッパ公演では、全ての台詞が金槌で釘を打つ行為に「翻訳」されたという作品ながら、その言葉はさながら疫病のように聞くものを蝕んでいく（『疫病流行記』）。 「言葉」に「肉体」と「行為」を与え、イメージで世界を転覆させようとした詩人・寺山修司の初期と後期を代表する傑作。
<p>仕事の都合で参加が遅れた松山に代わり、久々に大野が進行を担当しました。二作品を読む合間には寺山演出の上演の録音を聴く時間も設け、結果は大盛況。もう松山の進行はいらない？そんな噂もあるとかないとか。</p>				
12/14 (13人?)	第八十三回	マーティン・マクドナー	『ウィー・トーマス』	世界の片隅、辺鄙な片田舎、小さな島の小さな家の中にこそ、世の不条理が詰まっている。一匹の猫の死から始まる、政治と暴力と愛と憎しみの空騒ぎを描いた、現代最高の劇作家が送るブラックコメディ。
<p>時間の都合で一部分しか読めなかった全国大会のリベンジです。今年は、マクドナーの年と言っても良いくらい、たくさん読みました。</p>				
12/14 (9人?)	特別企画 『忘本会！2019』			毎年恒例、「最後まで本を忘れて飲みましょう！」という会です。
<p>だいたい本の話をして終わります。</p>				